平成29年度　第2回北九州市子ども読書推進会議（要旨）

１　日　　時　　平成29年11月13日（月）10：30～12：00
２　場　　所　　小倉北区役所　8階　812会議室
３　出 席 者　　〔委　員〕山元悦子委員（会長）他１２名
　　〔事務局〕古賀教育次長　他１２名
４　会議次第
（１）子ども図書館で行う研修の在り方について
（２）その他

５　主な質疑応答

○ 子ども図書館で行う研修の在り方について

事務局／　本日の議事では、「子ども図書館で行なう研修のあり方」について、皆さんの意見をいただく。

子ども図書館が開館したのち、平成３１年４月以降の計画の案である。

まず、「学校図書館教育講習会」だが、現在、指導第一課が行なっている。これは、職務研修なので、今後も、指導第一課が所管し、引き続き実施する。

２つ目は「学校図書館職員研修」。一般的に「学校司書」という名称だが、本市では「学校図書館職員」と呼んでいる。この研修は、指導第一課で実施しているものを、基本的に引き継ぎながら、子ども図書館で内容を整理し行う。学校図書館を担当する教員、司書教諭、国語科教諭などとの連携がいるから、指導第一課と連携、協力しながらと取り組むことにはなるが、所管は子ども図書館と考えている。

次の「ブックヘルパーの研修」だが、本年度は実施していない。２７年度の実績を参考に、これを是非復活したいと考えている。学校に、ボランティアで来ていただいているブックヘルパーの研修を年２回行いたい。

新設の研修として、「学校における読み聞かせボランティアの研修」を考えている。以前の会議で、読み聞かせボランティアの中でも、学校に入るブックヘルパーや、学校で読み聞かせをする場合の配慮事項や課題があるのではないかというご意見いただいた。学校に読み聞かせボランティアで行っていただく方についての研修を考えている。

次に、今、中央図書館で行っている２つの講座だが、人材育成にも大きく関わり、研修と言ってもよい中身も含まれている。「読み聞かせボランティア養成講座」と「子ども司書養成講座」については、今ある形を踏襲しながら、内容については、委員の皆さんに意見をいただきながら、考えていきたい。なお、本年度の「読み聞かせボランティア養成講座」「初心者向け」と「経験者向け」、

「子ども司書養成講座」の資料を参考までに付けているので、ご意見をいただきたいと思っている。

簡単だが、枠組みを示しているので、意見をお願いしたい。

会　長／　今回は、子ども図書館で取り組む研修についての議事がメイン。研修内容に関して、この５つの枠組みで、話を進めていきたい。特に、新しい研修のイメージについてや、質問を中心に受付けつつ、その後、意見等を伺いたい。

委　員／　現在、学校の実態があまり把握されていない状況だと思う。ブックヘルパーが図書館の整理と本の修理だけをしている場合と、読み聞かせボランティアを兼ねている場合がある。また、読み聞かせボランティアが校内の保護者でつくられている所と、外部から読書ボランティアが入っている所のように様々な形態がある。朝読みをしている所、昼読みをしている所、ブックトークをしている所など様々。どれぐらいの学校が、どういう状況でボランティア読書活動をしているのかが把握できてない。研修をする前に、市内全体の学校の状況を把握した方がよいのではないか。

会　長／　どの研修にも関わる内容だが、まずは、ブックヘルパーの実態調査、実態把握をしたらどうかという意見であった。

委　員／　学校図書館職員が、ブックヘルパーとどのように関わったらよいのかというところが、悩ましいところだと思う。学校図書館職員の研修の中に、ブックヘルパーとの関わり方や、働きかけ方まで盛り込まれたら、先生方も仕事がしやすい環境がつくれる。

もう１つ、「読み聞かせボランティア養成講座」に関しては、まさにタイムリーと言える。中央図書館の「読み聞かせボランティア養成講座」を受けた方が、「やる気はあるが、どこで、どういう活動をしてよいか分からない」と相談に来た。養成講座の中で、活動の場に関する情報を提供したり、各地域での活動をコーディネートしたりできたら、活躍してくれる方が増えるのではないか。

会　長／　ブックヘルパーの実態把握に加えて、学校図書館職員の役割等の実態把握が必要ではという意見であった。ボランティア講座を受けた方たちを資源と捉え、人財バンクをつくるなど、どこに行けば、どんな活動ができるかという情報を提供することも必要という意見であった。

委　員／　読み聞かせボランティア、ブックヘルパー、学校司書などは、各立場で皆さ

ん困ることをたくさん抱えている。現状の把握と、各現場で困っている問題点をきちんと洗い出して、それに答える研修が必要。「読み聞かせボランティア養成講座」だが、今は少子化が進み、働きに行くお母さんが多くなり、乳幼児のお話会を聞きに来てくれる親子が少なくなっている。そんな状況の中で、読み聞かせボランティアをたくさんつくっても、活動する場所がない。各図書館には、かなりの数の読み聞かせグループが入っている。現状を把握すること、問題点を洗い出すこと、養成講座後の展開を考えること、この３点を、しっかり押さえていかないと、せっかくの研修がもったいないことになる。

会　長／　問題点を洗い出して、研修の組織や内容を、もう１度練り直してはどうかという意見であった。

委　員／　文部科学省の調査によると、発達障害等で特別な支援を要する子どもたちは、全体で６％程度、小・中学校に在籍しているのではないかというデータがある。そのデータからすると、１クラスに２、３人は支援を要する子どもがいることになる。図書館に関わる業務を行なう時、こういった子どもたちと関わる可能性は出てくるので、そうした学習活動や、レファレンス時の支援について配慮していただくと、子どもたちも助かると思う。そういった特別な支援を要する子どもたちに関する研修は予定されているか。

事務局／　市内の学校の実態把握と課題についてだが、学校図書館については、司書教諭等を中心とした担当の教諭がいて、学校図書館職員、更に、ボランティアの方に支えていただくという、３者が連携した形で取り組んでいくのが最終形だと思っている。そこに行き着きたいが、市内全体の学校の状況は様々である。子どもたちにとって使いやすく、有益な学校図書館になるような研修のスタートラインをどこに置くか考えるには、全体の実態把握が必ずいる。実態を見ながら整理して、なるべく効果的な研修に積み上げていきたい。

　ボランティアの件については、ボランティアバンクを本格的に整理したい。そうなった時は、各地区図書館とつながって、そこからボランティアを派遣するという形がやりやすいが、研修を含めた内容と派遣の仕方について、今後整備がいる。今すぐに地区図書館というふうにならないが、そういう形を目指してやっていく。

　特別支援については、子どもたちは実態が様々で、課題もあると思う。これから勉強しないといけないこともたくさんあるが、全ての研修で、そのことは視野に入れている。学校図書館職員の研修であっても、ブックヘルパーの研修であっても、その他の研修や講座であっても、特別支援学級の子どもたちにど

んな配慮がいるか、どんな課題があるかという点は、取り入れていく必要がある。

会　長／　特別支援の配慮について、様々なノウハウが欲しいという意見だったが、そういう情報自体は、それぞれの研修の中で提供するにしても、情報を持っている人たちについての当てはあるのか。

事務局／　市内の特別支援学校に、これまで何校か、県立も含めて意見を伺いに行った。その際、ハード面でも、ソフト面でも、参考になることがたくさんあった。それを１つ１つ、実現していくことが大事。特別支援教育課等にも助けていただき、子どもたちが使いやすく有意義な中身にしていきたい。

会　長／　情報収集は、着々としているということなので、それらを反映した研修になればよいと思う。

委　員／　保育園の立場、幼稚園の立場から思うと、「子ども図書館」のイメージが、「小学校以降が対象」と感じられる。幼児期も６年間ある。保育士は、今、市内に３,０００人ぐらいいる。全く素人というわけではなくて、日々読み聞かせしているので、ある程度の力量はあると思う。そこで今度は、本選びであるとか、読み方のコツであるとかについて、相談する場所や研修があるとよい。その辺の支援は、どのようになるか。

事務局／　いわゆる「子育て関連施設」にいる学齢期以前の子どもたちも、全て対象にしている。つまり、「学校図書館」と言いながら、そこで行うサービスは、保育所や幼稚園、それ以外の子育て支援施設も視野に入れたものとなっている。ただし、学校図書館職員研修、学校図書館教育講習会など、対象が限られたものについては、学校が対象になる。もちろん、読み聞かせボランティアの派遣や運営相談については、全ての子育て関連施設も対象にしている。現在、保育所については社会福祉協議会、幼稚園については教育センターで、希望制ではあるが研修をしている。そうしたところとも連携していく必要がある。

委　員／　読み聞かせボランティアについては、もう少し保育所や幼稚園を開拓していただくと結構あると思う。あと、ブックヘルパー研修と学校における読み聞かせボランティア研修の中に、どちらでもよいので、保育所・幼稚園向けの研修を入れていただきたい。

会　長／　学校における読み聞かせボランティア研修では、今後、対象範囲を広げて対応を考えたらいかがかという意見であった。

委　員／　私が住んでいる区の各小学校で、どんなグループが活動しているのか自分たちには分からない。一方、近隣の市民センターでは、読書をキーワードにして、いろいろな団体や年齢層を、館長が積極的につないでいる。配布資料を見ると、市民センターの育児サークルなどが抜け落ちてしまうのではないかと心配になる。図書館に登録していないが、市民センターのエリアで、保育園にもいっていない子どもとお母さんに読み聞かせをしているグループもある。全体像を把握する際は、市民センターも大きな情報源になるのではないか。

会　長／　読み聞かせボランティア養成講座の参加者を募る際に、市民センターで活動している方にも、情報が提供できるようなシステムが必要という意見であった。

委　員／　一般の方が、「読み聞かせがやりたいです」と申し出て、突然できるわけではない。やはり地域の方の活動の場として、市民センターを活用していただくのがよい。地域の人材発掘の点から考えても、市民の生きがいづくりということでも、市民センターを拠点の１つに加えていただければと思っている。

会　長／　高齢者の生きがいづくりからも、ボランティアの希望者を、広く市民センター中心に募ってはいかがかという意見であった。

委　員／　読み聞かせ以上の活動ができるボランティアが、もう少し増えてもいいかと思う。中央図書館からも、これらの派遣要請がブックネットに来る。読み聞かせボランティアは、読み聞かせをしたくてなったと思うが、ブックヘルパーには、かなり可能性がある。学校の図書室整備だけではなく、ブックトークやビブリオバトルができると思う。子ども司書にも、かなりの可能性がある。読み聞かせ以上のことは、本来であれば図書館の司書が担当する児童サービスと思うが、なかなか人手も足りない。現場で経験を積んでいないと、ニーズに応えていくのは難しいと思う。そろそろ北九州も読み聞かせ以上の児童サービスができる人材を増やす研修を考えていただきたい。

事務局／　読み聞かせボランティア養成講座の経験者向け講座というのが、今、委員が話したことに対応できていると思う。こうしたことを、どう広めるか、ブックヘルパー研修でも取り組んで欲しいという意見も参考にして対応する。

会　長／　ブックトーク、ビブリオバトル、アニマシオンは、本来、学校司書のプロのわざ的な所がある。学校図書館職員研修の中に、読書活動に関する手法の研修を入れるという考え方もあると思う。また、経験者向け講座で対応しているという説明であった。読み聞かせ以外のことを広めたり、養成したりするという点でアイディアがあれば、情報提供いただきたい。

委　員／　今、話に出たような取組みというのは、少しずつ広がっていく方が、面白い展開になると思う。いろいろな引き出しが子どもたちにはあるので、それぞれ刺激していくことが大切と思っている。

福智町の図書館は学校と提携をして、図書館司書が授業に入って、ブックトークであったり、ビブリオバトルであったり、教科書に基づいてさせていただいている。学校の先生の中には、授業中に注意が必要な子どももいるので、そのケアを、教職免許も持っていない図書館司書にできるのかと、疑問を感じている方もいる。そのため、研修というよりは、むしろ、学校の先生と図書館司書がディスカッションをして進めていくことが大切。

今年は６校と連携させていただいている。ビブリオバトルになると、原稿を持たずに人の前に出てしゃべるので、読書に親しんでいない子どもにとっては、恥ずかしい思いをするだけのものになってしまう。そこで、ワークシートをつくって挿絵を入れたり、人数が少ないグループに、図書館司書が１人ずつ付いて話を盛り上げたりするなど、少しずつの積み重ねが必要になってくる。現在想定している研修内容に、プラスアルファするような形で考えていく方が、スムーズにいくと思った。

もう１つ、研修場所は、今度できる子ども図書館でやると思うが、主催は指導第一課なのか。対象が学校関係者であるとすれば、図書館司書との関係性はどうなるのか。公共図書館で働く司書は、指導する立場になれるのか、支援をする立場になるのか。そういったところの整理ができると、活動しやすくなる。

会　長／　興味深い事例を紹介していただいたと思う。図書館司書が、学校に出向いたということだが、そのアプローチは、図書館の方から情報提供して学校に入っていって、ディスカッションして実現したということなのか。

委　員／　福智町には公共図書館がなかった。ただ、新しく公共図書館ができても、いきなり本を手に取るという状況は生まれない。そこで、まず子どもたちがどんな教科書で勉強しているか知ろうと思い、教科書を図書館司書が読み込むことから始めた。学校図書館の現状を、公共図書館が知ることによって、「こういう状況であれば、こういうところを手伝えます」という話をもって、公共図書館

の方から、学校に入って話をさせていただいたのがきっかけである。

会　長／　そういう事例収集というのが必要だと、話を聞きながら思った。

事務局／　「指導」と「支援」の話があったが、授業に入る場合、公共図書館の司書であろうがゲストティーチャーであろうが、授業そのものに関わるときは、あくまでも支援だけで、指導することはできない。子どもたちにとっては、指導の一環だと思うが、あくまでも、授業をする先生がいて、それを支援をするという形になる。子ども図書館の学校支援センターが考えている全ての事業は、支援の立場のものがほとんどだ。ただし、学校との話し合いや、適切なアプローチの仕方が重要になる。立場は支援や協力だが、ただ待っていても話は進まないので、今、例を示していただいたように、指導部や学校そのものと、いろいろ連携しながら進めていくというイメージでいた。

委　員／　確かに実態調査は大事だと思う。こういう研修をする時、１、２年で人が入れ替わる場合は初任研しかできない。でも、定着して１０年、２０年とボランティアをやって人材がいれば、経験者コースや研究コースまでいって、指導研究も含める研修も考えられる。実態調査で、そういう部分も調べると、どういう研修をしていくか見えてくる。公共図書館から、ブックトークなどの技術をもって学校に行っている事例は、県内でも結構ある。

　図書館司書が育って、地域の人たちに読書を伝えていくという仕組みを、子ども図書館が担うとすれば、図書館職員研修も必要ではないかと思う。中央図書館の職員、子ども図書館の職員だけでなく、地区図書館の子どもを担当している職員も、ある程度力を付ければ、その人がボランティア養成講座の講師という立ち位置でやっていける。そういう仕組みをつくると、いろいろなところから、講師を呼んでこなくても自前で研修ができる。福岡県立図書館では、職員が県内のいろいろな地域に講師として出かけて行って読書の普及をしている。それも県立図書館の仕事として位置付けている。せっかく子ども図書館ができるわけだから、そういう仕組みをつくっていけば、研修ができる力を持った人材が育つ。

会　長／　公共図書館の司書を対象とした研修、この上のレベルの研修をする人たちを養成する研修という理解でいいと思うが、その点についていかがか。

事務局／　子ども図書館だけではとてもできないことで、あまでも、中央図書館や委員会と話し会いながら進めていくってことになる。ただ、大切なことだというこ

とはよく分かるし、全国でも求められていることで、大事な視点だと思う。

委　員／　現場で必要なことは、実演して見せること。公共図書館の司書、学校図書館の司書、プロで資格を持っている方たちが、ちゃんとして見せるということ。しかし、そういう立場にいる方から、自信がない、やった経験がないなどという相談を受ける。司書の研修を、きちんとして、その方たちがきちんと実演ができるようにする必要がある。「学校の図書委員に、ビブリオバトルをさせたいので、見せて欲しい」という話があったので、うちのメンバーが、ビブリオバトルを子どもたちに見せたところ、子どもたちが、自分たちもやってみたいと意欲満々になった。きちんといいものを見せる。見せるためには、やはり実演する場の研修がいると思う。図書館の司書を指導できるぐらいのレベルにする研修が、北九州にも必要と思う。

会　長／　新しい学校における読み聞かせボランティア研修。この研修を担当する人の研修の見通しはいかがか。

事務局／　最終的に自前でできたら、それは理想形だと思うが、最初は、講師等を招聘して行うことを考えていた。

会　長／　学校における読み聞かせに限定しないが、内容をもう少し詰めて、それを誰がするかということになると思う。研修内容について、具体的事務局のイメージなどを聞かせていただきたい。

事務局／　これは、委員の皆様からいただいた意見を基に起こした研修であるが、「学校における」とわざわざ付けたのは、学校では、授業に入ることもあるからだ。ただ読み聞かせをするのではなく、子どもたちの状況に合わせる必要があるとか、高学年だったら読み聞かせよりも読み合いだとか、もう少し突っ込んだ内容の研修をしたい。また、特別支援学級の場合はどんな配慮がいるかとか、先生、学校図書館職員、ブックヘルパーとの連携はどうしたらよいかとか、そうした、より具体的な中身にしたい。

会　長／　福智町の図書館の事例などから、アイディアをいただくと、一般の読み聞かせボランティアの方が対象でもありつつ、地域の図書館との連携で、学校にどう関わるかということを、この研修の内容としてよいのではと思った。

委　員／　出前セミナーというのが、今回取組として、新しく設けられていると思う。

保育園や幼稚園の先生が研修するといったら、やっぱり夜の６時、７時からの時間帯になってしまう。こういう時間が設定されたものに、皆さん参加できるかとなったら、なかなか難しい。どこどこ保育園ではこの曜日の何時から、皆さんの都合がいいですという感じで、出前セミナーを利用したらどうかなと思う。

会　長／　固定した場所と回数で行うという研修のあり方以外に、こちらから出向いていくという形で、ニーズに合わせていく。一点突破じゃないが、そういったことも可能かと思う。興味深い意見だったが、この可能性はいかがか。

委　員／　私は、生涯学習の方で出前講座の講師登録をしている。中央図書館の方でも、こういう読書に特化した研修の出前講座をつくってはいかがか。市内には、出前講座で読書関係の話ができる方がいると思う。読書に特化した出前講座の登録バンクがあってもよいと思う。

会　長／　生涯学習の方にノウハウがあるようなので、そういうことも活かしてはどうかということだが、いかがか。

事務局／　すでに、２つの出前を持っている。１つは、出前セミナー。企業・市民センター子育て関連施設等からの要請により、子ども読書活動に詳しい専門家を派遣し、子どもの読書の大切さや、読み聞かせの手法についてのセミナーをしている。もう１つは、出前講演。読み聞かせの手法というよりは、読書の大切さや意義、本市が取り組んでいるプランの全体像、子どもへの関わり方といったことを中心に、市民センター、学校などにこちらから出向いて行って講演している。このことについての広報不足を感じたので、今後、広報に力を入れたい。

会　長／　さらに一層、推進してほしいというのが、委員の皆さんの意見かと思わる。

委　員／　水巻町では、今年度、学校と役場がひとまとまりになっていて、学校図書館の司書も、公共図書館から派遣するという形でしている。水巻の小・中学校に新任で入った先生、初任者指導担当の先生、学校司書、水巻図書館のメンバーで、小学校１年生から中学校３年生までの国語の教科書から、図書館教育に関するページを全部拾い出し、ワークショップ形式で学び合うということをやった。教科書の中で、子どもたちがどのように、学校図書館に触れるのかを理解することが大前提なので、そのことを疎かにせず、子どもの読書に関わっていきたい。学校図書館職員研修の中でも、教科書の中での記述についての学びが

しっかりあるのかどうか、そこは大事なことだと思う。

会　長／　今の紹介は、学校図書館職員研修の中身としての事例であり、公共図書館の司書と学校が教科書を中心として何ができるかを検討する際の参考になるものである。これは、学校図書館教育講習会の中身にも当たるかと思うがどうか。

事務局／　学校図書館教育講習会、これは各学校の教員対象で、学校図書館職員も一緒に参加をするという形で行っている。内容は、本市が今取り組んでいるプランを基に、読書活動がどのように市全体で動いていて、学校がその中でどういう部分を担っているのかを理解してもらうもの。職員研修の一環として、市の政策、そして教育の政策について主に話をする中で、各学校に配置されている学校図書館職員の活用、ブックヘルパーなど幅広く学校図書館の仕事に携わる人たちとの関わり方などを学ぶ場となる。

会　長／　その中に、効果的な事例の紹介を入れれば、司書教諭の方たち、担当教諭たちも意欲が湧くかと思うので、今の貴重な事例紹介等を参考にしていただきたい。あまり時間がないが、特に、「学校における読み聞かせボランティア研修」を立ち上げるにあたり、情報提供やニーズなどがあれば、この場で伺いたい。

委　員／　学校現場にとって緊急の課題の「学力向上」については、読書活動推進が、大きな役割を担っていると思う。ブックヘルパーの研修を復活していただいたり、読み聞かせボランティア研修を新しく取り組んでいただいたりすることは、ありがたい。特に、教科書を読み合うとか、それを展示するとか、素敵なことだ。学年に応じたプログラムづくりもよい着眼点だと思う。子どもたちに、ますます本を好きになってもらい、本が北九州市の子どもたちの１つの文化になってほしいと感じた。

会　長／　熱い想いを語っていただき、研修をする側にも、元気をいただけると思う。

委　員／　学校の立場からですが、前任校では、読み聞かせのボランティアをＰＴＡの方々にしていただいた。子どもたちにとっては、貴重な経験をさせていただいたと思う。ただ、中学校では時間がなかなか取れない。小学校は、朝自習の時間帯に読み聞かせボランティアに来ていただいて、継続的にしていただいているということだが、そういうことはとてもありがたい。子ども図書館が読書活動を推進する拠点になることを感謝している。

委　員／　もし、保育園で読み聞かせボランティアの研修やブックヘルパーをしていただけるとなったら、その時は、外部の講師を呼ばずに、この会議の委員になっている司書の方やボランティアの方に、いろいろな読み聞かせの実演していただくとか、現場で感じている悩みに答えていただくとか、そういったことで、まず、第一歩はいいと思う。

委　員／　ＰＴＡとして、私自身感じることは、やはり保護者として学校の先生方の大変さ。それを見守る保護者の立場から見ても、本当に読書というものは必要だと感じていた。本年度、地域の方々とともに、ビブリオバトル大会を開催した。幼稚園の子もいるし、小学生もいるし、おじいちゃんおばあちゃんも来てくれた。４０人ほどの参加があったが、その中で、保護者の一人が、「ボランティアをしたい」と言ってくれ、その後、小学校の読み聞かせボランティアにもなった。ＰＴＡとして何ができるかと考えた時に、体力向上、学力向上というのは、学校に任せる部分が大きいと思うが、読書活動推進の発信は、私たちＰＴＡもやっていけることではないかと思う。もっともっと自分の学校、校区だけではなく、区全体、その次は北九州全体というように、読書活動の推進をして行きたい。

会　長／　ＰＴＡ、家庭からのボトムアップに関して協力いただけるという有難い意見であった。

　時間がきてしまい、まとめることもできないが、特別支援の配慮を全ての研修の中に盛り込むなどの意見や、貴重な事例をいくつも紹介していただいた。ここでいただいた意見を参考にして、さらに子ども図書館の行う研修の内容を決定していかなければならない。

事務局／　それでは、これで議事を終わりにする。